

協賛企業賞

水と共に生きる

三田中学校 一年 小原里咲

「洗濯物をしまわなきゃ。」

窓から外を眺めると雨が降っていた。雨の音はポツポツ、パラパラ、シトシト、ザーなどと表現されるが、私はそれらの中でもパラパラの状態が好きだ。小雨とも言えるが、軽く降る雨は、さわやかで心地良い。あわててベランダに出ても、洗濯ものはまだ大丈夫、ぬれていなかった。

適度に降ってくれる雨は良いが、最近の雨は「ゲリラ豪雨」とも呼ばれるくらい短時間に多量な降水量だ。私達の予想をはるかに上回る被害を各地にもたらしている。晴れていた空が突然の雷で辺り一面真っ暗になり、激しい雨が叩きつけるように降っている。

夏のある日のこと、図書館からの帰り道、偶然私は豪雨に打たれた。雷の様子を見て、建物の軒先に立ち止まりながら自宅を目指し歩いた。いつもは明るい道が一変して、暗い不気味な雰囲気にも包まれていた。足元は道路に水があふれ、転びそうで走れず全身がぬれてしまった。水が恐ろしいと感じた瞬間でもあった。帰宅すると、心配していた母から、「雷が鳴っている間は、急いで帰らなくていいから、建物の中にいてね。」と言われた。もちろん分かっていることだったが、怖くて早く家に帰る体気持ちのほうが強かったのだ。

時には、人間を苦しめる水だが、なくてはならない面が多い。私達が生きていくためには、必要不可欠なものである。植物や動物などの生き物にも必要だ。我が家では、兄が今年の春から緑のカーテンを作った。私も時々世話を手伝い、風船かずらの成長を見守った。そして、緑のカーテンの素晴らしさを多くの人に伝えたいと思い、私は双子の妹と共に、紙芝居を完成させたのである。地球の環境問題、植物の育て方、緑のカーテンの作り方などを分かりやすく絵に描き、登場人物を決め物語を考えた。何ヶ月にもわたる作業の中で、植物を育てるために一番大切なのは水だと分かった。植物は、毎日水をもらうと元気になる。暑い時は下を向いてしまうが、水をあびると生き返ったように上を向く。たつぷりの水で、風船かずらは立派なカーテンになり、直射日光をさえぎってくれた。

私達が普段使用している水は、川に流れ、海から蒸発し、雲になり、再び雨となつて私達の元に戻ってくる。このような仕組みを知ると、水を大切にしなければならぬと思う。

水の怖さ、恐ろしさは確かにあるが、生きていくためには水と仲良く過ごしていきたい。

私は毎日の生活の中で、水のむだ使いをしない、食器を洗う時は先に汚れを拭き取る、合成洗剤を使いすぎないなど注意をしている。私達を助けてくれる水を、大切に扱ってあげたい。紙芝居を通じて、環境問題に興味を持ち、地球に優しい暮らしをする人が増えてほしいと願う。貴重な水、素晴らしい水の力に感謝して生活していきたい。